

さざなみ

# 国語教室

さざなみ国語教室  
 第471号 2021年6月25日  
 発行者代表 吉永幸司  
 連絡先 大津市柳川2-11-5  
 TEL 077-522-1008  
 発行所 滋賀児童文化協会  
 NPO 現代の教育問題研究所

## 力をつけた研究発表会 下山 和子

教職三十八年の最後の年、コロナ禍の最中であつた。実はこの年研究発表会を控えていた。しかし、コロナのために紙面発表になつてしまった。

この研究発表会を国語の教科で行うのを決めたのは、私が校長になつて二年目のことである。研究発表会をするなら、国語で行いたいと常々思つていた。それは、子どもたちの様子を見ると、「先生トイレ」という言葉のように、しっかりとした話ができない子どもが多かつたからである。「先生トイレに行きたいです」と話すことが、子ども同士のトラブルを減らすことにもつながるといふ気がし

たのである。そこで、問題になつたのが、講師の先生である。自分の頭にいちばん上がったのが吉永幸司先生である。市の教育委員会に務めていたとき、吉永先生の本を読ませていただいた。共感できるところばかりで、先生をお呼びし、学校全体で勉強できればよいと考へた。自分のできる最大限の知恵を絞り、吉永先生とお話できるよつになつたときの喜びは今でも忘れることができない。

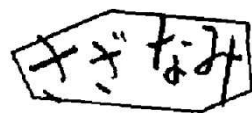
「国語力は人間力」を合言葉に国語の研究が進められた。研究一年目の夏には吉永先生のお話を聞く機会を設けることができた。私

を拓くということ皆さんはどう考へていますか？僕は、中学に行つても国語が好きだという子どもを作ることで「とおっしゃつていた。国語は小学校ではいぢばん多くの時間を費やす。その国語が好きであるということとはとても大切なことだとお話を聞きながら感じた。「国語力は人間力」を目ざして、学校の職員がチームとなり取り組んだ。その中で「振り返りシート」や「ノート検定」などを通して、話す・聞く・読む・書く力を育ててきた。特に、吉永先生がおつしやつたのは丁寧な言葉で最後まで話すことが大事だということ実践した。

次第に子どもが変わつていくのがわかつた。そして、教室の中が落ち着いてきた。自分の意見を発表しやすくなり、聞くことも楽しそうであつた。日常生活では語尾まで言える子どもが増えた。成果が出るよつと先生たちもやる気が出る、そんな良いサイクルができた。

コロナ禍だったが、その中で、先生たちや子どもたちが国語の力をつけることができた。吉永先生のおかげであると、心から感じている。ありがとうございます。

(前中央小学校長)



▼「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業の改善がすすめられていく。「深い学びの鍵として『見方・考え方』を働かせることが重要になる」(解説書)という意味で

教師の専門性が発揮されることが求められると指摘している▼子供の学習活動が多様になると共に、グループや個別学習活動の割合が多くなつたのは授業改善の成果である。生き生きと学ぶ子供達に對して「専門性」はどのように発揮するべきなのだろうか。一般的には、学習の見通しや教材研究・指導法の工夫が上げられる。それは、専門性というより教師の資質・能力に関わるものであり、従来から大事にしてきたことである▼鍵になる言葉は「見方・考え方」である。「どのような視点で物事を捉え、どのような考へ方で思考していくのか」という物事の捉え方や理解すること。そして、学習や生活において「見方・考え方」を自在に働かせることができるよつにするのであろう。「見方・考へ方」は、子供の学習履歴から知ることでもできる。授業という生きた場で見取することもできる。さらには、意図的に指導をすることも大事である▼国語科においては、子供が使つている言葉の実際と言葉の内容に視点を定めることであらう。「専門性」は子供と距離を置いて発揮できるものでないからである。

(吉永幸司)

**モデル・きたじまくん**  
北島 雅晴

学級の子どもたちに話をすると、よく「きたじまくん」が登場する。きたじまくんは、ちよっと変わったはいるが、どこにでもいそうな子である。

「休み時間に、他のクラスの子とけんかをして、泣かされてしまいました。その時、よしこちゃんに来てくれて、『きたじまくん、だいたいどうぶ？泣かなくていいよ』と優しくなぐさめてくれるので、余計に泣きたくなってきたのです。」

といったように、私の幼い頃の話を語る。等身大のきたじまくんである。読み語り等いろいろな話をする中で、きたじまくんの話は、子どもたちが一番楽しみにしてくれる。

きたじまくんは、学習の中でも登場する。たまに優等生の場合もあるが、どちらかというと、あまり出来のよくない場合が多い。

「これは、きたじまくんが書いた作文です。ちよっと変だな、直した方がいいと思うところはどこでしょうか。」

と、二年生の子に投げかける。

「六行目の、かぎかっこのところは、行を変えた方がいいです。」

「ちよっとひらがなが多すぎる。いくとか、たべるは漢字の方がいいと思う。」

「題名が『きのうのこと』では、何が書いてあるのかが分からない。題名を変えた方がいいと思います。」

「どんな題名がいいと思うかな。」

「えっと、『家でよくでレストランに行った』とか『おいしいオムライス』とか……。」

「その前に、食べたことで書くのはよくない。もっと誕生日だなというのを書いた方がいいと思います。」

「そうだね。行ったこと、食べたこと、遊んだことを書くと、大体はうまくいかないこと、よく覚えていたね。」

日記を書く時に、どんなことに気をつけたらよいかを考える学習である。その他にも、カタカナの使い方、一文の長さ、文章の終わり方等、これでもかというほど至らない点を見つけようとする。身近な？きたじまくんの存在が、効果的に働いていると思われる。

学習前に、作文や読み取りノート等、実際に子ども立場で作ってみることに取り組んでいる。実際に作ることによって、どういうことに苦労しようか、どんなことに意欲をもちそうかといったことが見えてくる。

子ども自身のノートは重要な教材になるが、教師の作品を活用すると効果が上がることも多い。これからも、きたじまくんに活躍してほしい。

(前・栗東市立大宝小学校)

**よく見て書く**  
原稿用紙の使い方  
(光村四年生)  
蜂屋 正雄

国語指導を始めて二ヶ月。日記も週一回程度書き続け、三〇〇字の日記を半数以上の子が書けるようになってきた。

一方で、書くことを明確にイメージできず、なかなか書けない子も当然いた。原因として、出来事や見たもの、経験したことを「そのまま書く」という経験が不足していること、また、「正しい書き方」を求めて、書きあぐんでいることがあると考え、今回の学習を考えた。

教師の動き(三十秒程度)をできるだけ詳しく書く

初めに、教科書「原稿用紙の使い方」を参考に、題の書き方・名前の書き方

・改行のルール・句読点の打ち方、などの教科書にあった基本的なことに加えて、物語文「白いぼうし」でも学習した、思ったことを鍵括弧を改行しないで使うことを確認した。

① 一時間の流れとしては  
② 学習目標を確認する  
③ 教師の動きを見て書く  
④ 班で読み合い、「いいな」と思ったところに線を引く  
⑤ 友だちのよい表現を自分の原稿用紙に書き足す  
⑥ 振り返りを書く

一時間目はとにかく原稿用紙の正しい使い方を意識する。二時間目は、保護者参観もあったが、友だちの良い表現を取り入れること、つなぎ言葉「でもなぜか」を入れること

○「終わり」として、見て書いたあとの感想を入れることを加えた。

一時間目では全員が一〇〇字を越え、二時間目では一四〇字を越えることができた。

原稿用紙の使い方も、自己評価と友だちによる評価、その後教師の評価も加えることで、句読点についてはほぼ全員、鍵括弧についても八割は正しく使えるようになった。

「(終わり)」「大人の人もいる前で、いろいろな動きをして、蜂屋先生ははるかしくないのかな」と思いました。

「蜂屋先生は、やっぱり蜂屋先生だな。」と思いました。

今日の先生も面白かったです。

「(児童の感想より)」

わたしは「そつと教室に入ってきて」と書いたけど、「どろぼうみたい」とか「あやしい様子で」など、いろいろな表現で書けるのがすごいと思いました。

友だちにはいろいろな表現が自分の中に入っているんだなと思いました。

ほとんどの人が四〇〇字以上書いていて、すごいと思いました。

子どもたちには、行数を増やすことを目的に書かせたが、今回書けたこと、書けるようになったことを楽しさや自信にして、今後の書く活動の励みにできようである。

まだ、話し言葉と書いた言葉の区別やつなぎ言葉の使い方など、全員が正しい原稿用紙の使い方が習得できたわけではないが、「経験をそのまま書き、感想を述べる」という活動は、今後の日記指導や学習のふり返り、学習感想にいかしていきたい。

(野洲市立北野小学校)

「あさがお  
かんさつにつき」より  
弓削 裕之

今年是一年生を担任している。以前、アサガオの観察カードに大切なことを学んだ経験がある。双葉の絵を描く事前指導として、「よく見て描きましょう。」「見たままに描きましょう。」などの指示をすると、「できあがった観察カードは、細部まで詳しく描かれた植木鉢の絵になった。「何を観察するのか」を明確に伝えなかつたから、子どもたちがめあてを見失ってしまつたのだ。」年生の言葉で言うところの今日の主役は誰でしょう」ということになる。とにかく手立てが必要だつた。今年、大きな植木鉢の絵と大きな双葉の絵を見せて、「どちらが双葉の日記でしょう」と比べさせた。子どもたちはすぐに、「ひとつは植木鉢さんの日記です」と気づいた。観察カードには大きく描かれた双葉の絵があり、根元の色の違いも塗り分けられていた。

「気づきを書かせる際も、「ポイントをしぼるといい」と先輩に教わつた。「行目は、目のマークを描いて「見たこと」について書く。二行目は、手のマークを描いて「触つたこと」について書く。三行目は、ハートマークを描いて「思ったこと」について書く。カードを書く前に、葉がどんな形をしているか子どもたちに聞くと、「丸みのある形」という表現がたたくさん出てきた。そこで、「見たこと」を「くみしたい」という言い方で書くことにした。」

ちようちようのはねみたくて。ふわふわしてました。おおくのびるといいです。はっぱがハートみたいなかたちです。つるつるでちよつとざらざらでした。とてもきれいでかわいいです。はっぱがすべりだみたいで。ちよつとざらざらしてました。きれいにそだつてほしいです。かたつむりのおうちで、そのやねみたいで。つるつるしてました。こんなにのびていてとてもうれしいです。はっぱがおしりみたいなかたちでした。つるつるざらざらしてました。いままで、じゅんちようにそだつてくれてうれしいです。はっぱがかさのかたちみたいで。つるつるざらざらしてました。あさがおが、こんなにせいちようするとはおもいませんでした。ちようちようとズボンみたいで。ずるずるもしてさらさらもしてました。きれいなあさがおになってほしいです。

朝、教室に入ってきた子どもたちのトップニュースは、アサガオさんのこと。はっぱがすくおおきいのです。みにきてください。「くきがのびてきました。もうたおれそうです。」アサガオさん、のどがカラカラつていてました。「むしさんがいました。だいじようぶかなあ。」「せんせいはげんきがないますね。どうしてですか。」先生のアサガオさんは、愛情が足りないのかな。みんなみたいに、毎日がんばって水やりをしますね。

(京都女子大学附属小学校)

「学ぶ力」向上の取組  
箕浦 健司

本校は、朝の学習の時間(八時二十五分〜四十分の十五分間)のあり方を、前年度の反省や児童の実態を踏まえ、毎年見直しを行っている。その中で、子どもたちの語彙を増やすため、今年度から以下の取組を行っている。

昨年度、職員作業で校舎内の階段の一段一段に、ことわざ・四字熟語・慣用語の意味と共に示したカードを貼り付けた。子どもたちが朝の登校時や休み時間など、階段を上る際に目にし、「言葉」を意識して生活できるようにするたためである。今年度は、掲示してある言葉を冊子にまとめ、全校児童に配付した。これは卒業まで持ち上がる。学級担任は、朝、翌日の連絡と共に、一つ言葉を選んで板書しておく。子どもたちは、連絡帳を書く際に、板書された言葉を視写する。例えば三年生は、連絡帳を書いた後、国語辞典等で言葉の意味を調べる。朝の会の「先生の話」の際に、調べて分かつた意味を発表する。毎日続けることで、子どもたちの語彙を増やしたい、習慣化したいと考える。また、月末には、「校長先生からのお題」として、一つのことわざや四字熟語を提示する。各学級で、示された言葉を使った短文作りに取り組み、代表作品を職員室前の掲示板に掲示する予定である。以下、ある学級の朝の様子。

(登校し、朝の準備を終え、連絡帳を書く。)

「あ、今日の四字熟語は『いきいゆう』やな。」

「どういう意味なんやろう。」(連絡帳を書き終えた人から、国語辞典を用意する。その後、朝の会。)

「今日の四字熟語は、『一喜一憂』です。どんな意味ですか。○○さん。」

「はい。ある物事の様子が変化する度に、喜んだり心配したりすることです。」

「そうですね。『喜』は喜ぶ、『憂』は心配する、という意味があります。では、どんなときに使うのでしょうか。」

「ゲームで勝ったり、負けたりしたとき。」

「サッカーとか、ドッジボールとか。」

「そうですね。学校やお家の生活で、『一喜一憂』していることつて、結構ありそうです。身近な言葉なのですね。」

学級によっては、黒板に言葉だけ示し、休み時間に、どこの階段に貼つてあるかを探そう促すこともある。休み時間が終わり、戻ってきた子どもたちは、

「先生！南校舎の二階に貼つてあったで！」

などとうれしそうに報告している。都合で見に行けなかつた友達もいるので、調べてきた人が発表してその意味を全員で共有する時間をとる。

このように、学習環境を整備し、取組を工夫することで、子どもたちが主体的に学び、語彙を増やしていけるよう、日々の積み重ねを大切にしていきたい。折を見て、各学年の取組状況を交流する場を設けるなどして、学校全体で進めて行きたいと思う。

(長浜市立南郷里小学校)

学級集団に応じた  
授業展開の重要性  
飯沼 俊雄

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の世界的な感染拡大という危機に直面した。日本では、2020年3月から、全国の小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等で臨時休業の措置が取られ、長期にわたり、子どもたちが学校に通えないという事態が生じた(文部科学省、2021)。新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染拡大は学校教育に甚大な影響を与えた。新型コロナウイルス感染症の感染拡大をはじめとする社会の急激な変化の中、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められている(文部科学省、2021)。そのような背景から、現行の学習指導要領では、目の前の事象から解決すべき課題を見出し、主体的に考え、多様な立場の者が協働的に議論し、納得解を生み出す思考力の育成や、対話的な学びを中心に位置づけた学力向上への施策が策定され(文部科学省、2021)、全国の小学校現場

で様々な実践が志向されている。

なかでも、「令和の日本型学校教育」の実現に向けた具体的な方策として注目が集まっているものに、GIGAスクール構想の実現による新たなICT環境を活用した協働学習があげられる。ICTの活用により「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念である「個別最適な学び」と、「協働的な学び」とを一体的に充実することを目指している(文部科学省、2021)。

しかし、ICTを協働学習に取り入れたからといって、必ずしも「協働的な学び」が充実するとは限らない。

2020年1月、「読み解く力」市伝達研修会において、第4学年国語科「初雪のふる日」の授業を公開した。この4年生の担任ではなかったが、2月に児童の実態と学級集団の状態を捉えることから始めた。学級集団の状態を診るためアセスメントを行った。本校では、教育相談で行うアンケートを標準化された尺度である「G.U. QUESTIONNAIRE-UTILITIES」(小学校用)(河村・田上、1999)を活用して、一人ひとりの支援に役立てている。この尺度は、学級集団の状態を把握することにも適している。このGから学級集団の状態を捉え、その状態でできる授業展開と残された時間を考慮して構

想していた授業を再度、練り直した。この単元では、交流を通して、自らの読みを明確にしたり、友達が発見した多様な謎とその証拠の結び付け方に気付いたりして自分の考えを再構築する力を育成したいと考えていた。従って、指導のねらいに基づき、グループ学習を自在に展開できるように、授業を行いながら、学びに向かう姿勢や参加態度、相互作用の質の向上等、学級集団の発達を促した。

「協働的な学び」を充実するためには、協働学習を展開される前提として、学習者個人が取り組むべきことと、チームワークの在り方、学習集団・グループの組織として達成すべき課題があると指摘している(河村、2017)。つまり、協働学習を展開するためには、教師が相互作用の質を高める方略を学級集団の状態に合わせて適切に介入することが求められている。

(湖南市立三雲東小学校)

参考文献  
文部科学省(2021)。「令和の日本型学校教育」の構築を目指して  
①全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現(答申)

河村茂雄(2017)。「アクティブラーニングを成功させる学級集団づくり」誠信書房

編集後記

▼五月例会  
(四百七十回)

由起さん(志津小)提案教材は「ウナギのなぞを追って」(光村4年)  
▼学習課題「興味を持ったことを中心に紹介しよう」である。学習は次のように進められた。①教材と出会い内容の大体を理解する②「興味を持ったこと」についてワークシートを活用して一人勉強を進める③興味を持ったことを話題にグループで交流を行う④興味を持ったことを紹介の文例を参考に四百文字ぐらいの紹介文を書く⑤紹介文を読み合い感想を伝える⑥生き物のなぞに関わる本を読み「びつくり生き物ひみつ新聞」を作る▼川端さんが大事にされたことは②のワークシートを活用して文章を自分の興味という視点に引き寄せたことである。文章の内容を理解するには、丁寧な読みが必要になる。しかし、「興味を持ったところ」を足場にすれば、グループの話し合いで、大事なことを広げることができると考えたのである。さらに、紹介文を初め、中、終わりの中に紹介の内容を書くというところで「要点」をまとめるという活動に力を注ぐ学習活動が仕込まれているのである▼研究会では、「深く読む」「正しく理解をする」という視点からの教材解釈や指導方法をもとに議論をした。特に「一人学習」とグループ学習の関わりや方法についても議論を深めることができた。

▼巻頭には、下山和子先生の玉稿を頂きました。感謝。  
(吉永幸司)